

ほっとけい会報

7年目迎えたグループの旅

初秋の信濃路を峠越え

「ほっとけい会恒例の秋の旅は迎えて7年目。今年も初秋の群馬、長野両県境をぐるりと大きく周遊した。鳥居峠などアップダウンの多い道をひた走ること220キロ、山道や坂道を歩くこと一日平均9千歩。嬬恋、鹿沢、安曇野の高原で胸いっぱい大気を吸い込んだ。絶好の秋日和に恵まれた楽しい2泊3日の旅でした。



2千メートル級の山々を望む嬬恋村の「愛妻の丘」

10月3日、社会部OBの原征、富田信吉のご両人と八幡、フリーライター久貝真澄さんは、東京駅から、今春開業した北陸新幹線の新型車両で軽井沢へ。長野の萩原莞二さんと合流し、5人で駅前からレンタカーに乗る。運転は、ご存じ4人の老友の介護役を兼ねる誕生日間近の最年少・ウン十代の久貝さん。

▼情けがない軽井沢族
まずは、旧軽井沢銀座の街並みを車窓から見物。この別荘地一帯では避暑で滞在中に飼っていた犬や猫40数匹が今年も置き去りにされて、町は対応に追われたと新聞で報じられた。「リッチな軽井沢族は、情けがないね」と嘆いた。

有料道路を走って、観光客で賑わう白糸の滝や鬼押し出しへ繰り出す。230余年前の大噴火で生じた溶岩の岩塊を背に、この9月の小爆発の噴煙が浅間山の右手にわずかに望める。この一帯は、キャベツの産地でも知られる嬬恋村。雄大な嬬恋高原には、いくつもの観光スポットが点在する。

▼旅の恥はかき捨て？
その中に、わが男性組を皮肉る？ような「愛妻の鐘」や「愛妻の丘」も。ハグする位置に足跡を刻んだ台。

原征さんに促されて台上で抱き合う格好をしたが、まるで四つ相撲で組み合ったよう。観光客も笑いながらカメラを向ける。「まあいいか、旅の恥はかき捨て」。1泊目は「休暇村鹿沢高原」。地酒にアユの塩焼きなどを堪能。

2日目は、来年のNHK大河ドラマ「真田丸」の舞台となる上田城址へ。1583年の築城当時から残るのは重文の西門のみで、真田昌幸の居城などは再建され、本丸跡は広い公園。春は桜の名所で賑わうようだ。

▼長い階段に苦闘
別所温泉に近い鎌倉時代中期の安楽寺は信州最古の禅寺で、本堂裏の山腹には国宝・八角三重塔がある。長い坂道を上ると、さらにつづら折りの110段の階段を上り下りする。拝観料を払って、杖を借りた。4年前に90年ぶりに相輪（塔頭部）を改修した三重塔は、木造の日本唯一の禅宗様式の建築という。それにしても歩かされたな。

この後、有料道路の三才山トンネルを通って国道254号を西に進み、安曇野地区に入る。前方に常念岳や大天井岳など2千数百メートル級の北アルプスの山々が青空の下に連なる。



「愛妻の丘」でハグの立ち位置確認



杖をついて安楽寺の八角三重塔へ

その夜は公共宿泊施設「ビレッジ安曇野」に宿泊。高齢者向きに設備が配慮された「名水百選の大浴場」や四つのベッドに和室付きの広い部屋に。夜が更けるまで飲んで話し込んだ。

▼湧水のわさび農場
最終日は、「ビレッジ安曇野」から近い東京ドーム11倍の「大王わさび農場」へ。年間120万人の観光

客が訪れるという全国一の広大なわさび田は、アルプスを水源とする湧水で潤う。信州サーモンやニジマスなどを養殖する長野県水産試験場を見学した後、市内のそば屋で信州サーモンを試食して松本へ。

松本駅から関東組は中央線の特急「スーパーあずさ」を利用して帰京した。
(八幡 裕隆)